

主要地方道松江-境線バイパス関係

埋蔵文化財調査報告 I

1976. 3

愛護協会

例　　言

1. この報告書は、島根県が計画した主要地方道松江境線バイパス建設予定路線内の埋蔵文化財発掘調査にかかるものである。
2. 調査は、工事主体者である島根県の委託を受けた島根県文化財愛護協会が、昭和51年1月から2月末日まで、延べ2か月間松江市西川津町で実施した。
3. 本書の執筆は、VIを除き、調査を担当した島根県教育委員会文化課主事横山純夫・川原和人が分担した。
4. 本書に使用した写真は、VIを除き、すべて横山が撮影し、また実測図の作成・添書は、それぞれの執筆者が担当した。
5. 牍章については、島根大学農学部改良木材学研究室後藤輝男教授、同古野毅助手の好意によるものである。
6. 本書に使用した地形図は、(有)松江測地社の作製にかかるものである。

目　　次

I	調査にいたったいききつ	1
II	位置と環境	1
III	橋本調査区	3
IV	柴遺跡	4
	柴I遺跡	4
	柴II遺跡	6
V	中尾頭遺跡	15
VI	柴遺跡出土の木材について	18



発掘作業風景

I 調査にいたったいきさつ

昭和47年、島根半島の東端部と鳥取県の丹波半島を結ぶ境水道大橋が完成したことによって、中海沿岸を循環する道路が確保された。それにともない県道松江一境線を利用する車は増加の一途をたどっている。こうした現状から、早急に交通緩和への対策を講ずることが要求され、島根県では、松江一本庄間のバイパス予定計画を立案した。そして、昭和48年2月松江土木事務所長から、バイパス予定地である松江一本庄間の遺跡分布調査の依頼が県教育委員会にあった。これを受けた県教育委員会では、2月20日・26日の2日間、分布調査を行い、26か所の遺跡を確認した。この調査結果をもとにルートの選定にあたっては、これらの遺跡をできるだけ保存する方向で検討するよう松江土木事務所長あて申し入れた。

その後、昭和50年2月に至って県道路課、松江土木事務所、県文化課の三者による文化財調査打ち合せ会を開き、松江側起点地域のルートを決定するために、西川津町橋本地区に所在する橋本、柴遺跡、大内谷地区に所在する中尾頭遺跡の発掘調査を行い、遺跡の実態を明らかにすることとなった。発掘調査は、島根県文化財愛護協会が島根県から委託を受けて実施することとなり、昭和50年3月に発掘調査委託契約を締結した。橋本、柴調査区は、昭和51年1月から2月末までの約二か月間を費やして調査を行い、中尾頭調査区は、昭和51年1月末から2月末にかけて実施した。

調査にあたっては、仙田筆吉氏、足立辰一氏をはじめとする地元各位の協力を頂き、無事終了することができた。なお、発掘調査全般にわたって、山本清島根大学名誉教授の指導助言をうけ、出土した木材の鑑定にあたっては、島根大学農学部改良木材研究室の後藤輝男教授、古野毅助手の手を煩わした。ここに記して深甚の謝意を表する次第である。

II 遺跡の位置と環境

今回発掘調査を実施した橋本、柴、中尾頭の三調査区は、松江市の市街地から北東に約3km離れたところに位置している。すなわち、島根大学の南側に広がる低湿地から、松江刑務所の北側の低丘陵地を通り、下東川津地区に至るまでの間に、これらの調査区が存在している。このあたりは出雲国風土記にいう島根郡に属し、松江平野の縫辺部の中でも遺跡が密集しているところである。^(註) これらの遺跡の中で、発掘調査などによって現在、性格が判明しているものを挙げると次のとおりである。

- タテチョウ遺跡　島根大学の南側に広がる水川の中に存在する遺跡で、今回調査を行った橋本調査区の西方約300mのところに位置している。この遺跡の一部は、過去において何回か試掘や発掘調査が行なわれているが、未だ、遺構らしきものは発見されていない。出土した遺物は、縄文式土

器から須恵器に至る各時代の土器があるが、それらはいずれも二次堆積によるものである。

2) 金崎古墳群 この古墳群が営まれている丘陵は、今回調査を行った柴遺跡等がある丘陵と、朝駒川を挟んで対面しているところに存在する。古墳群の中で全長約36mを測る前方後方墳（1号墳）は、長さ約4m、幅、高さ共に約1mの竪穴式石室を持ち、仿製内行花文鏡、直刀、須恵器等を出土している。これら出土した遺物の中で注目されるのは須恵器で、最も古い形式を示し、山陰の須

(注3)

恵器の編年上きわめて重要な意味をもつものである。

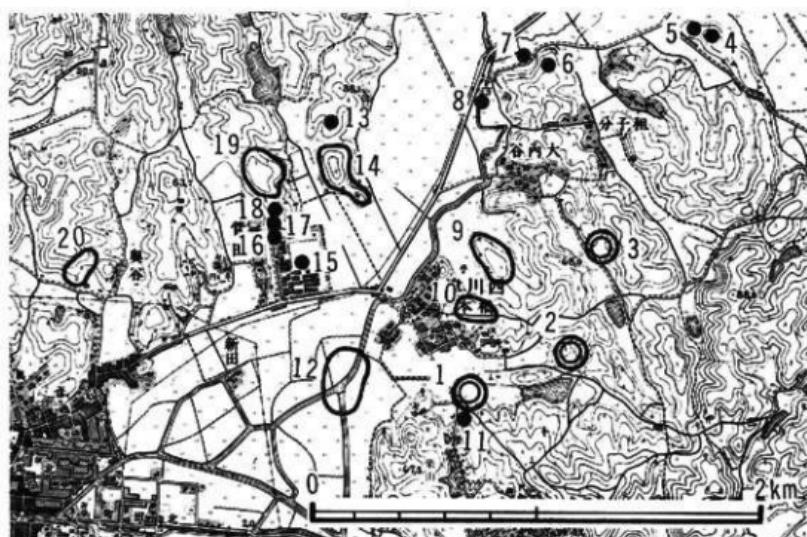
3) 菓師山古墳 金崎古墳群が存在している丘陵の西側に並行して走る低丘陵上に位置する。箱式石棺と思われる主体部からは、仿製四乳鏡、刀身、鐵鎌、土師器、須恵器等が発見されている。この須恵器は、金崎1号墳出土のものと同様山陰では最古式に属するものである。既に消滅している。

4) 菖田丘古墳 この古墳は、菓師山古墳の北側に接した比高約30mの丘陵上に存在する。内部主体は、2.5m×1.2mの竪穴式石室を簡略にしたような一種の箱式石棺で、この中から水晶及びガラ

(注4)

ス玉類が出土している。現在島大構内に移築してある。

5) 馬込山古墳群 この古墳群は、柴遺跡の北西側約500mのところに存在している。群をなしている古墳は、それぞれ一辺10m前後の方墳で、木棺を内部主体に持つものである。（川原和人）



第1図 地形と周辺の遺跡 (注5)

- | | | | | |
|-----------|-------------|------------|------------|--------------|
| 1. 横本調査区 | 2. 柴遺跡 | 3. 中尾頭遺跡 | 4. 川津第11号墳 | 5. 川津第12号墳 |
| 6. 貝崎古墳 | 7. 西川津貝崎遺跡 | 8. 西川津弥生遺跡 | 9. 馬込山古墳群 | 10. 横本古墳群 |
| 11. 横本道路 | 12. タナチヨウ遺跡 | 13. 福山古墳 | 14. 金崎古墳群 | 15. 島大構内遺跡 |
| 16. 菓師山古墳 | 17. 菖田丘古墳 | 18. 小丸山古墳 | 19. 島大後古墳群 | 20. ひのきん山横穴群 |

III 橋本調査区

今回発掘調査を実施した橋本調査区は、松江市西川津町2639番地外に所在し、昭和10年代頃多量の土師器片を出土した橋本遺跡^(注)が存在する丘陵の北側低湿地にある。

当初、この地区は、橋本遺跡に隣接していることから何らかの遺構が存在するのではないかと考えられていた。

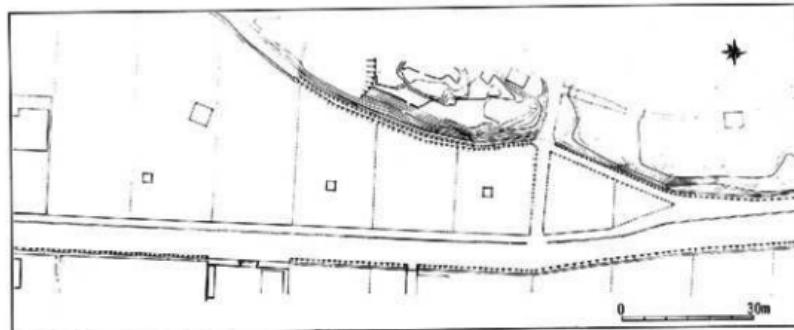
しかし、 $2 \times 2\text{m}$ のグリッド

を3か所設定して行った調査の結果からは、何ら遺構、遺物を検出することができなかった。昭和49年松江市教育委員会が、本地区の南側約50mの地点を発掘したが、その結果でも遺構、遺物は検出されなかった。これらの事実から、橋本遺跡の北側に面した低湿地には、遺跡は存在しないものと考えられる。

グリッドの断面にあらわれた層位は、耕作土の下に深さ50cmあまりの灰褐色粘土層があり、その下に灰色、黒色の粘土層が約50cm続き、さらに多量の有機物を含む暗茶褐色粘土層に至る。そして発掘した最下層(表面から1.7m～2m)には、暗青灰色のシルト層が存在していた。この層位は、同じ川津平野に存在していて、昭和49年～50年にかけて松江市教育委員会が発掘調査を行ったタテチョウ遺跡のそれと大体似かよっているが、タテチョウ遺跡で遺物を包含していた砂礫層は本地區ではみられなかった。(川原和人)



調査区全景(東より)

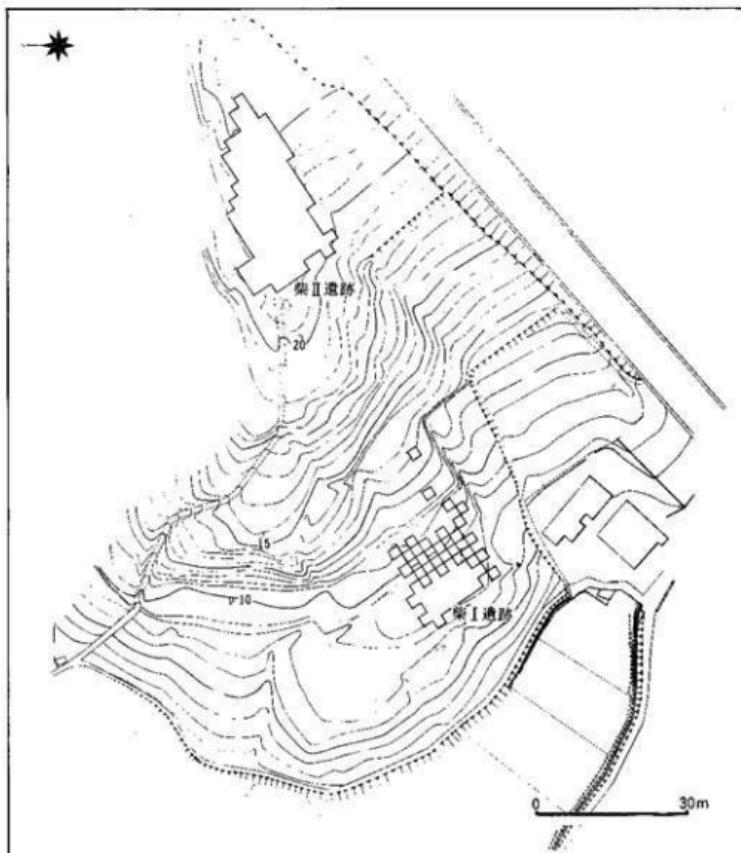


第2図 地形及びグリッド配置図

IV 柴 遺 跡

柴遺跡は、松江市西川津町3054-1および3059にあり、地目は畑地および山林である。西川津町橋本部落の一番奥まったところで、和久羅山から西へ派生した低丘陵が切れるあたり、すなわち川津の沖積平野に接する低海抜丘陵の緩斜面および頂部に位置する。

調査の都合上、斜面の畑の部分をⅠ遺跡、頂部の山林をⅡ遺跡として区別したが、両遺跡は地形からみて本来一つの遺跡として取り扱かうべきと考え、一括して柴遺跡と呼ぶことにする。



第3図 地形及びグリッド配置図

柴I遺跡（第4図）

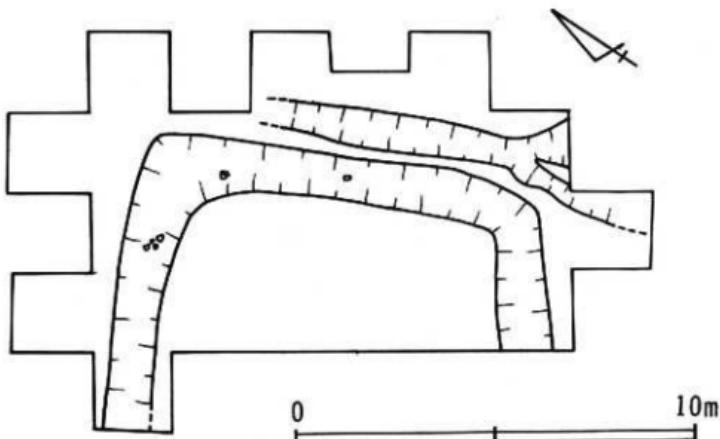
標高8~10m、水田面よりの比高4~6mのところにあり、西へ向かってゆるやかに傾斜する地点にある。調査対象面積は、約600m²あり、全面に2×2mの方形グリッドを設定した。調査は遺構確認のためにグリッドを一つおきに掘り、確認部分についてのみ拡大するという方針で実施した。



柴I遺跡全景（北より）

その結果、現在畑として耕作している場所については、すでに地山を掘り返していることがわかったため、遺構の存在は望めず、調査対象地域から除外した。

遺構検出面は、現地表下約20~30cmの所にあり、赤色の地山に掘りこんである。地山の上面にはすぐ耕作土がのっており、遺構の上面は既にある程度削り取られていると判断された。遺構は方形の周溝で、幅1m、深さ30cmをはかる断面U字形のものである。周溝内は黒褐色土が入り、須恵器片・埴輪片を含んでいる。一部は耕作のため破壊されているが、残存部についてみると、端から端まで約10mをはかり、当初建物に関係のある遺構を想定していたが、柱穴等何ら検出できず、一方



第4図 柴I遺跡遺構全体図

掘溝内から埴輪の出土をみたことで、古墳時代の埋葬造構（墳丘を削平された古墳の周溝部、方形周溝墓的な造構）である可能性も考えられる。

いずれにしても、地山上面の削平が事実であり、この部分から以前何らかの遺物が出土したという記録がない以上、その性格、形態について断を下すことは困難であるが、後述の柴II遺跡の調査結果とも併せ考えてここでは一応方形墳の周溝部として報告することとし、今後の事例を待ちたい。

出土遺物は前述のごとく、須恵器片、埴輪片のみであるが、以下それについて説明を加えることにする。

埴輪は2片出土しているが、いずれも周溝部の東辺で、

遺構面より約2cm浮いて遺存していた。円筒埴輪片で、厚さ1cm程度のものであるが、小片のため全形を復元することはできない。内外面共に斜めに荒い刷毛目が走っている。

須恵器は、周溝部の北辺より出土したもので、埴輪片と同様、黒褐色土中に地山より若干浮いた形で検出した。小片に割れており、16片を接合した結果、約半分の修復が可能であった。高台のつく環で、口径12.8cm、高さ4.5cmをかる。環部は口縁部がほぼ直線的に立ちあがり、外傾する。内外面共にロクロナデで仕上げているが、底部内面は荒いハケ状のもので整形後ナデている。高台はつけ高台で、若干外側に開く。高台の内側はロクロケズリで整形している。底部にはかすかに糸切り痕をとどめる。出雲国庁第4形式に属する須恵器と思われる（第5図）。

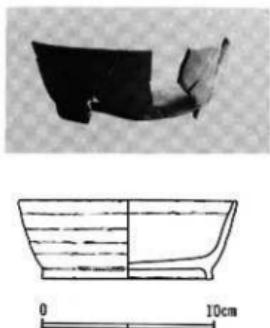
埴輪と奈良時代末期の須恵器が同一土層から出土したということは、本来両者が併存する可能性が薄く、しかも点数がわずかであるという点において、これらが本造構に直接伴う遺物かどうか明らかではない。

柴II遺跡（第6図）

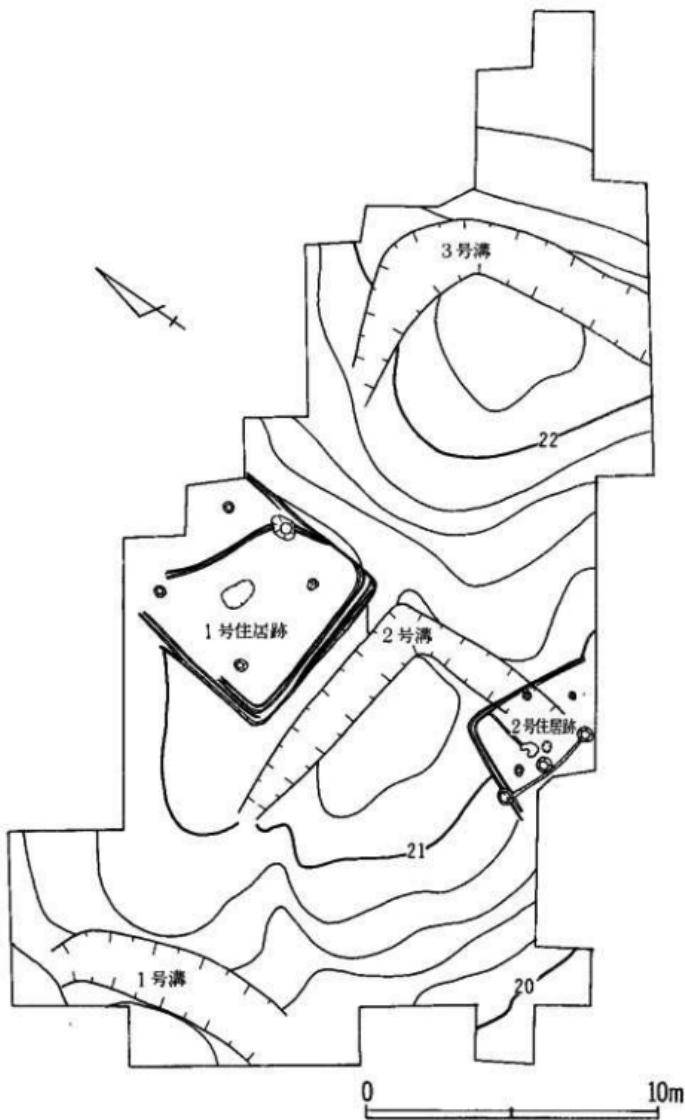
低丘陵の頂部に位置する遺跡で、踏査時には土師器小片を1片採集したのみであるが、この付近が「ハツ塚」と呼ばれていること。以前丘陵の南端を削り取って道路をつけた際、古墳らしきものを破壊したことがあるらしいこと。一時畠として使用するために土地を大幅に削平していることなどから造構、特に古墳の存在を仮定し、調査にふみ切ったものである。

調査はI遺跡と同様、2mグリッドを一つおきに掘り、造構の存否を確認しようとしたのであるが、丘陵全面に造構の存在が確認されるにいたり、全面発掘にしたものである。

検出した造構は、住居跡2棟、溝状造構3本であり、住居跡は北側を1号、南側のそれを2号、溝状造構は西より1～3号とした。これらはいずれも当初の予想通り相当の削平をうけており、残存状態は悪かった。



第5図 柴I遺跡出土遺物



第6図 柴II遺跡遺構全体図



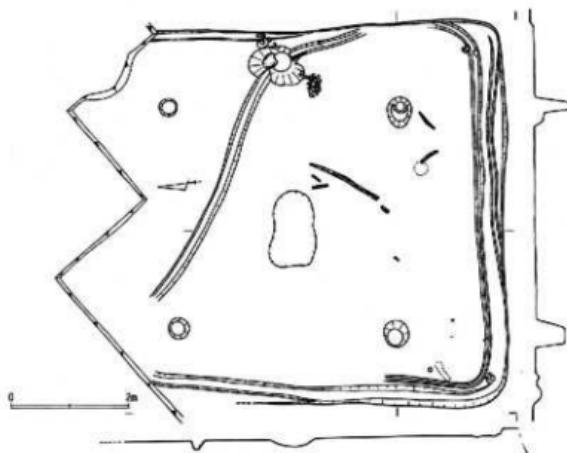
柴II遺跡全景(西より)

〈1号住居跡〉 (第7図)

丘頂の北側に位置し、北辺は削平により消滅している。一辺約6.5mの方形の竪穴住居跡で、壁高は南側の最も残存状態が良好な所で約15cmをはかる。床面は南に向かって、若干上がっているものの、状態は悪く、風化が著しい上に地山が薄く剝離する性格をもっているため、その検出には困難を極めた。中央には 1.2×0.5 m、深さ10cmの楕円形の炉が遺存し、内部は土が焼けたために赤褐色を呈し、かたくしまっている。柱穴は四隅に各1個づつあり、柱間は一辺3.8mの正方形を呈する。南側の2個の柱穴は、いずれも内側に若干傾いており、南東のそれは二段になる。また東壁の近くに不整形の深さ30cm余りのビットがあり、それに注ぎ込むような形で、上縁幅22cm、下縁幅10cm余り、深さ15~20cmの梯形の溝が住居跡床面を横切っている。周溝は竪面にそって二本検出した。外側の周溝は、幅15~20cm、深さ3cm程度のもので、南西隅と東側の一部を欠いている。また内側のそれは幅10cm、深さ2cm前後のもので、南側と西側の一部を残すのみである。いずれ



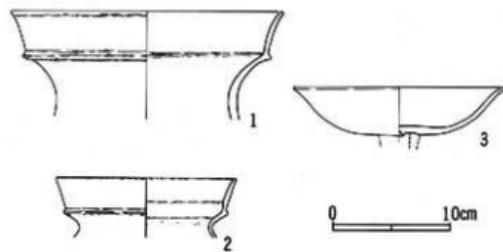
1号住居跡全景(東より)



第7図 1号住居跡実測図

も残存状態はあまりよくななくこれらが同時期のものか、あるいは改築によるものか、その判断は出来なかった。

また床面の中心部、径約3mの範囲は、厚さ約3cmの炭化物を含んだ黒褐色土層で覆われており、数本の炭化した木材が入りこんでいる。これらの状態から火災に遭ったものとも想像できるが、断定はできない。炭化木材は、幅6cm前後のもので、材質はかしである。^(註1) 炭化している上に、上からの圧力によってつぶれており、厚さについては不明だが、その形状から、垂木状の木材とみて間違いないものと思われる。検出した木材は小片も含めて6本であるが、いずれも原形を復元するのは困難である。



第8図 1号住居跡出土遺物実測図

遺物は、土師器片のみで、住居跡の南壁の両端と、不整形のピット付近に集中して検出された。いずれも小片であり、全体の形を推定できるのは、わずかである。

壺形土器 (第8図1,2)

共に胴部以下を失なっているが、口縁部はやや外傾しながら直線的にのび、頭部が内側へ急曲する、いわゆる複合口縁をも

つものである。内外面共に風化が著しく、整形痕は消えてしまっている。

1は推定口径23cmのもので、口唇部は丸みを帯びる。全体にしっかりした感じのつくりで、口縁部に比べて頸部の厚さが厚く、ケズリは認められない。また装飾用の施文も認められない。胎土は良好で、黄褐色を呈する。



1号住居跡出土遺物

2は推定口径15cm程度で、頸部が短かく、急曲して胴部につながる。全体的に器肉は薄く、きやしゃな感じをうける。口縁部内側は中ほどで厚くなり、頸部との境でえぐられている。口唇部は平坦である。装飾用施文は認められない。胎土良好で、色調は黄褐色である。

高坏形土器（第8図3）

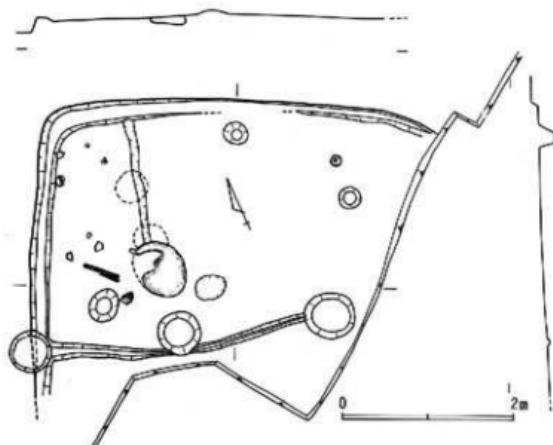
口径18cmをはかり、脚部をつけ根より欠損している。接合部の中央に細いくぼみがあり、まわりが盛り上がっており、整形技術を知る上で示唆を与えてくれる。^(注12) 坏部はゆるやかなカーブを描いて外反する、底の比較的浅いものであり、底部との境に稜線は認められない。風化が著しいため整形痕は認め難い。胎土は良好で、黄褐色を呈する。



2号住居跡全景（東より）

〈2号住居跡〉（第9図）

丘陵の南端、1号住居跡と丘頂をはさんで相対する位置にある。調査範囲の関係上、全体を明らかにすることはできなかつたが、傾斜地に営まれているため、壁面はいずれもトレンチ壁付近において消滅している。方形プランの竪穴住居跡であるが、四隅のうち北西隅のみ確認したにすぎないため、規模については不明である。しかし、北壁はトレンチ壁付近でわずかに曲線を

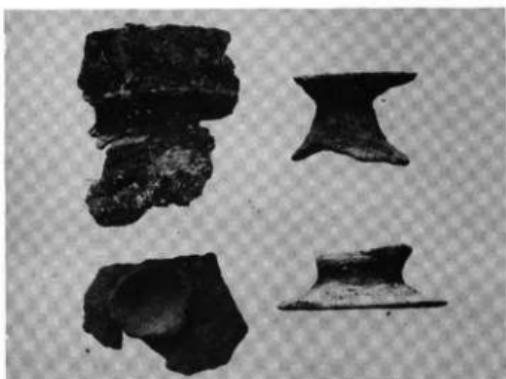


第9図 2号居住跡実測図

描いており、その様子から壁長は推定5m前後としてよさそうである。床面は丘陵の傾斜に伴って北から南へわずかに傾斜しており、また2号溝と重複しているため、北壁の中心部から南へかけて若干おちこんでいる。

住居跡内堆積土は、赤褐色地山上面に薄く茶色粘土質層があり、暗黄褐色粘土層、暗灰色粘土質層（耕土）とづく。その内、第二層の暗黄褐色層に遺物を包含し、炭化物・土器粉末片等により、よごれた感じの土層である。

壁にそって周溝がめぐっており、北西端で幅22cm、深さ6cmをはかる。また床面中央を東西に溝が走り、同一レベルで周溝とつながっている。ビットは7穴認めめたが、中央のそれは焼土を含んだ長径38cm、短径30cm、深さ2cm前後の浅い椭円形のもので、が跨様のものと考えられる。さらに中央の溝にそって検出した3穴のビットは、いずれも径50cm程度、深さ30cm前後のもので、180cmの間隔をおいて一直線につながる。このことからこれらのビットは、住居跡とは直接



2号居住跡出土遺物

関係のない後世の遺物遺構に伴う柱穴と推定できる。他に床面中央部の西寄りのところ、炉跡様ピットの付近に、長径70cm、短径60cm、厚さ10cm程度の楕円形の灰緑色粘土が遺存し、それの北側に接して、および約30cmの間隔をおいての、2か所に径40～50cmの範囲で床面が焼けた跡がみえる。さらにその2か所の焼土をつらぬくような形で北壁

から粘土塊へむけて断面U字形の深い溝が走る。これらの構造は、いずれも住居跡に伴うものであることは疑いの余地はないが、その目的・使用法等については、明確な判断を下すことはできなかった。

遺物は、1号住居跡と同様、炭化した木材と土師器片である。木材は、粘土塊の西寄りの所に、長さ50cm、幅8cm位の範囲内に2～3本かたまって遺存している。材質はけやきである。土師器は、壺・高環片が炭化木材の近くに、蓋形土器、低脚壺が北東隅に検出され、他に破片が北西隅を中心にして数点遺存していた。

壺形土器（第10図1）

推定口径19cm余りの複合口縁をもつものである。胸部の中ほど以下を欠いているが、風化が著しいことと併せて非常にうすいつくりである。口縁部は直線的に立ちあがり、若干外側へ開く。口唇部は丸みをおびる。頸部は短く、口縁部共に装飾用施文は認められない。内面は頸部以下に不明瞭ながらケズリの手法が見られる。胎土、焼成共に良好で、黄褐色を呈す。

壺形土器（第10図2）

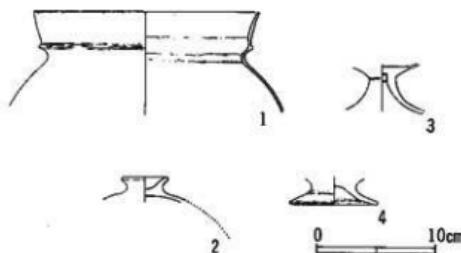
径4cmの円形つまみをもつ土器である。つまみは上端がなめらかに開き、内部は丸く凹んでいる。蓋部は破片の状況から比較的深いものと推定できる。

高環形土器（第10図3）

壺部とのつけ根の部分のみ検出した。脚部はなだらかなカーブを描いて開く式のもので、接合部は中央にくぼみがある。整形痕等認められない。赤褐色を呈し、1号住居跡出土の高環と同時期みてよいと思われる。

低脚環形土器（第10図4）

蓋形土器とも考えられるが、ここでは一応低脚壺として報告する。脚部径7.5cmで、外側はなだらかにカーブしながら壺部へ移る。内面は脚部の中ほどでわずかながら稜がつく。胎土焼成共に良好で、淡褐色を呈す。



第10図 2号住居跡出土遺物実測図

〈1号溝〉

調査区の西端、丘頂よりやや西よりに位置するが、調査日数等の関係で、一部の調査を実施したのみである。

遺構は、幅2.5~3m、深さ30cm前後の規模で、検出部についていえば、北端が若干西側に曲がっているところから方形の溝と考えられ、さらに溝内部から埴輪片、土師器片が多数出土したこと、方形墳の周溝の東辺の一部と断定した。



1号溝全景（南東より）

古墳は地形図でみる限りにおいて、一辺約10mの方墳と思われるが、相当の削平をうけており、詳細は墳丘部分の調査を実施していない現段階においては不明といわざるを得ない。溝は、黒色系の土が覆っており、大きく三層に分けることができる。すなわち、黒色土、黒褐色土、黒色土、赤褐色地山となっており、いわばサンドイッチ状の堆積をしている。遺物は埴輪、土師器で、三層のすべてから検出されるが、特に下層の黒色土からが多い。いずれも風化の度合が著しく、埴輪片にいたっては、全体の復元是不可能である。それから考えて、遺物は原位置にあったものとは思われない。

〈2号溝〉

調査区の中央部分、1号住居跡と2号住居跡の間に位置し、一部は2号住居跡と重複している。最大幅1.5m、深さ30cmのL字形のプランをもつ溝で、1号溝と同様方形墳の周溝と思われるものである。四辺のうち北辺と東辺のみ残っており、他の二辺は後世の加工および削平によって完全に消滅している。残存部の角はほぼ直角に曲がり、土師器高环2個体が遺存していた(第11図1)。
(注13)

溝内は1号溝と同様の土が覆っており、下から黒色土、黒褐色土、黒色土の順になっている。1号溝と同様、一辺10m前後の方墳の周溝部であろう。断面U字形を呈するが、墳丘部への傾斜の方がより急になっており地山加工の墳丘であることをうかがわせる。

遺物は上記高环の外、埴輪、須恵器が出土しているが、そのほとんどが細片である。



2号溝全景（東より）

（3号溝）

調査区の東端に位置し、標高約22mをはかり、2号溝に比べ約1m高くなっている。

検出した溝は、1、2号溝と同様、方形墳の周溝と思われるものだが、調査区の関係で、北辺と東辺の一部を検出したのみである。最大幅2m深さ25cm位のもので、北に行くにしたがって浅くなり、北辺は西側部分を欠いている。やはり地山を加工した古墳で、西辺の周溝は検出できなかつたが、そのあたりで地山が自然に下がつており、その傾斜が本来のものに近いとすれば、元來あったものか否か疑問である。

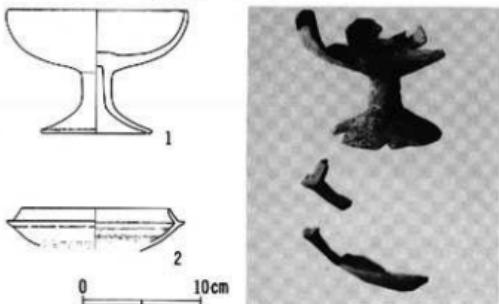
覆土はやはり黒色系の三層からなり墳丘部への傾斜が急なこと、2号溝と同様である。

遺物は、東辺の周溝内より、須恵器蓋環片(第11図2)、土師

器細片が出土したのみで、墳丘主体部および盛土については確認できなかつた。



3号溝全景(東より)



第11図 2,3号溝出土遺物

小 結

本遺跡は、低丘陵に営まれた遺跡であるが、調査の結果上記のとおり、住居跡2、古墳周溝と思われる溝状造構4を検出した。

住居跡は、2棟ともその出土土器が古式土師器のうち新しい時期に属するものと思われるところから概ね5世紀代の前半に営まれたものとみてよく、この時期の住居跡研究の上で、特に方形プランをもつ住居跡として新たな知見を加えることができた。また住居跡に重複して検出した溝状造構は、古墳の周溝と断定してよいと思うが、その古墳の築造年代は、出土土器より6世紀後半にもつてくることができる。主体部は確認し得なかつたが、木棺直葬墳とみてよいであろう。

いずれにしても、同一丘陵上に、住居跡と古墳とが重複して遺存していたという予想だにしなかつた事実は、それが開発に伴うものだけに埋蔵文化財調査の難しさを如実にあらわした遺跡といえる。(横山純夫)

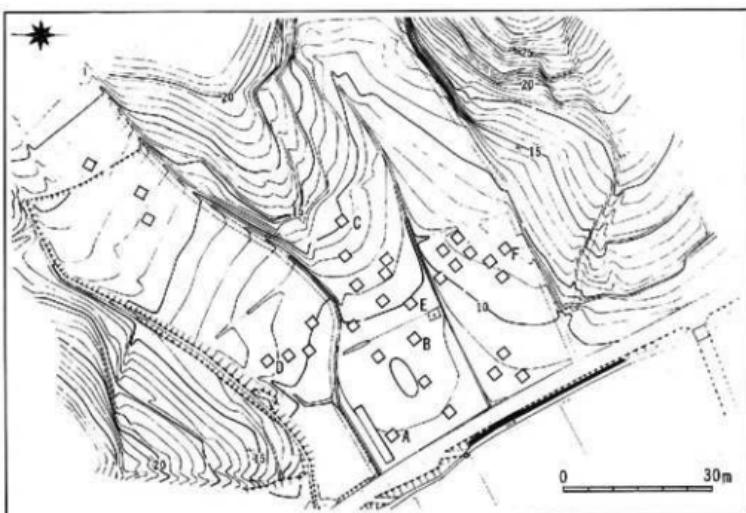
V 中尾頭遺跡

この遺跡は、松江市西川津町字中尾頭284番地外に所在する。ここはちょうど、嵐山山塊から派生する主丘陵から大内谷の狭長な谷底平野に向かって伸びる三つの丘陵で囲まれた所に位置している。地目は畑地で、この畑の表面に少量の須恵器片、土師器片が散在していたため、当初は集落跡と考えられていた。

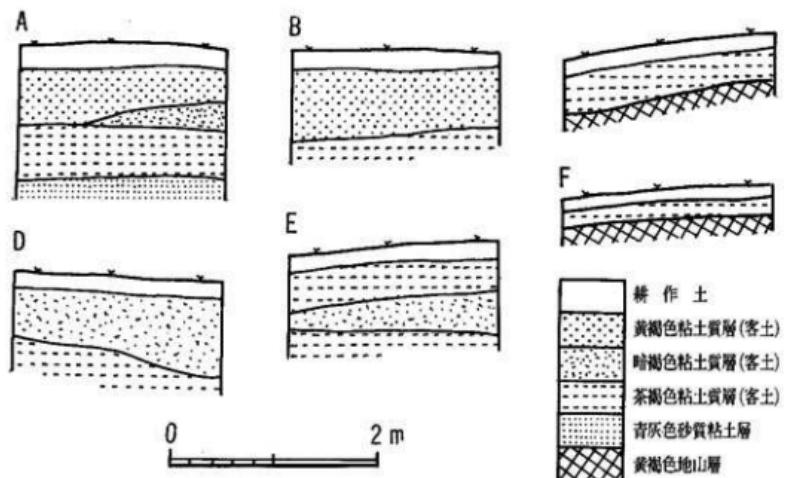
しかし、発掘予定地の全面に 2×2 m のグリッドを設定し、そのうち32穴を発掘した調査結果では、客土と思われる土層から須恵器片が1片出土したほかは、何ら遺構、遺物を検出することはできなかった。この須恵器片は、大きな壺形土器の胴部の破片と考えられ、焼成は良好で、外面にはタタキ目を有するものである。



中尾頭遺跡全景（南西より）



第12図 地形及びグリッド配置図（アルファベットは断面図のグリッドを表す）



第13図 グリッド断面図

発掘したグリッドの層位（第13図）をみてみると、最も水田に近いAグリッドでは、20cmあまりの耕作土の下に約1mの客土が施しており、発掘した最下層には、沼上と思われる青灰色砂質粘土層が存在していた。そして他のグリッドでは、10~20cmの耕作土の下にそれぞれ0.3~1.2mの客土があった。これらの層位からこの発掘調査区は、現在、谷底平野に存在している水川との比高が2mあまりを測るが、もとは谷底平野と結びついていたことが知られる。そして、おそらく付近の丘陵を開墾した際に出てきた土をもって畠地に改変したものと思われ、その開墾中に跡跡を破壊したため、発掘調査区に当初少量の土器片が散在していたものと考えられる。（川原和人）

（注）

1. 文化財保護委員会「全国遺跡地図」島根県 1967年)
2. 昭和49年11月5日~16日、島根県教育委員会試掘、昭和49年11月11日~11月30日、松江市教育委員会試掘、昭和49年12月3日~昭和50年2月17日、松江市教育委員会発掘
3. 島根県教育委員会「島根の文化財」第3集 1963年)
4. 山本清「島根大学敷地裏山古墳遺物について」(『山陰古墳文化の研究』所収 1971年)
5. 宮道正年「島根大学敷地裏丘陵の古墳群について」(『吉田考古』第11号 1969年)
6. 池田満雄、東森市良「出雲の國」(学生社)
7. 文化財保護委員会「全国遺跡地図」(前載)、宮道正年「島根大学敷地裏丘陵の古墳群」(前載)、そして

- 昭和48年2月に県教委文化財保護主事近藤正が行なった松江-本庄間のバイパス建設に伴う分布調査結果をもとに作成した。
8. 島根大学名誉教授山本清氏の傳教示による。
 9. 島根県農林水産部農業開発課『出雲開発地域 土地分類基本調査 松江』(1974年)によると、周辺の赤色土壤は、川津統と呼ばれ、「(略)堆積岩を母材とし、地質時代の赤色風化により(略)色相が赤褐色を呈し、きわめて強粘質の堅密土壤で、施肥の浸透も少ない。(略)」とある。
 10. 松江市教育委員会『出雲国府跡発掘調査概報』(1970年)の編年による。
 11. 後載報告文参照
 12. 山本清「山陰の土師器」(『山陰古墳文化の研究』所収 1971年)によると、このように环部底面に凹みをつくる技法は、古式の土師器高环に通有の手法としておられる。
 13. いづれもほぼ同形のもので、第11図1は、高さ10.5cm、口径12.5cmのもので、环部は丸く内側しながら立ちあがる。环底部は若干盛り上がり細い脚がつくが、櫛は大きく聞く。軟質で赤褐色を呈する。
 14. 山陰の古式土師器の鍵尾Ⅱ式より若干新しい様相を呈するものと思われる。
 15. 山本清「山陰の須恵器」(『山陰古墳文化の研究』所収 1971年)では、古墳時代の須恵器をⅣ期に分類しており、それによると本遺跡出土の須恵器は第Ⅲ期に属すると思われる。

VI 柴遺跡出土の木材について

島根大学農学部助手 古野毅

松江市西川津町柴遺跡の1号住居跡および2号住居跡から発掘された木材について、それがどの樹種に属するかの鑑定を行なったので、その結果を報告する。

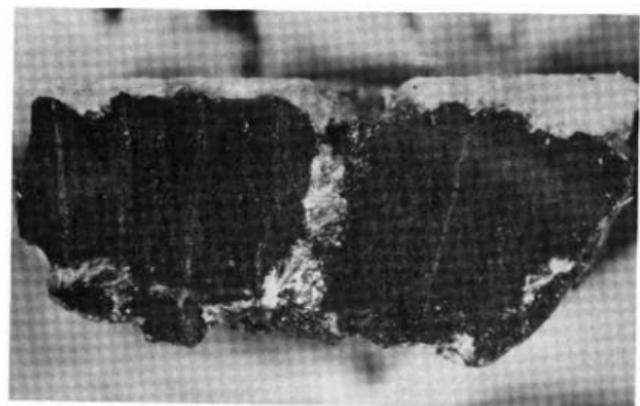
1. 調査方法

土塊に付着している木片は厚さが薄く、その内部にも土が浸入しているが、軸方向に割裂性があり、繊維状構造をもっていることから明らかに木材であると確認できた。しかしどんどん炭化しているため、木片を採取すると垂直方向にも簡単に折れ、土を落すのに水洗すると容易に解体してばらばらになりやすかった。その程度は1号住居跡の試料の方が著しかった。肉眼的観察では判別がつかないので、顕微鏡観察に供するため、採取した試料をカーボワックス法により包埋して組織を固めた。この包埋試料の横断面をスライディング・ミクロトームで切削して実体顕微鏡で観察した。なお、試料が炭化しているため、ミクロトームによって切片を得ることが困難であった。

2. 鑑定結果

(1) 1号住居跡の試料について

道管が認められ、明らかに放射方向に配列していることから、放射孔材に属している。道管はほ



1号住居跡の試料の横断面 (11倍)

とんど孤立管孔である。広放射組織が明瞭である。また帯状柔組織が認められる。以上の解剖学的な根拠に基づけば、本試料は、カシ類〔ブナ科コナラ属アカガシ亜属(*Cyclobalanopsis*)〕の木材であると鑑定できる。

(2) 2号住居跡の試料について

年輪が明瞭に認められ、年輪界に沿って径の大きい道管が配列していて、明らかに環孔材である。孔間の道管は1~2列である。孔間外道管は接線状ないし斜線状であるのがかろうじて観察される。



2号住居跡の試料の横断面（8倍）

放射組織がほぼ均等に走向しているのが認められる。以上の解剖学上の識別に基づけば、本試料はケヤキ (*Zelkova serrata* Makino, ニレ科) であると明確に鑑定できる。

昭和51年3月25日

主要地方道松江-境線バイパス関係
埋蔵文化財調査報告Ⅰ

発行 島根県文化財愛護協会
県教育委員会 文化課内
印刷 株式会社 報光社
代表取締役 原利津子